

枕詞「三枝の」考

——「ミツマタ」を排して残るもの——

一 「ややくさの」の歌

枕詞「さきくさの」が読みこまれる歌は三首ある。万葉集に二首、古今和歌集に一首。万葉集には、卷五・九〇四に山上憶良が作者かとも思われる長歌の句に「三枝の中にを寝む（父も母もそばに離れないで、さきくさのように自分が真中に寝よう）」とある。「三枝の」はナカにかかると。「サキクサ」は枝が三つに分かれるのでナカにかかるといふ。

また、卷十・一八九五の柿本人麻呂歌集の作品に、「春さればまつ三枝の幸くあらば後にも逢はむな恋ひそ吾妹」と「春になると先づ咲くという」三枝の」とあるように、三枝という植物の自然における生態が示されている。歌の技巧としては、「先づ先」と「三枝」が懸詞になり、「幸く」にかかる序となっている。

古今和歌集の仮名序には、

六つには、いはひ歌。

この殿はむべもとみけりさきくさの三つば四つばにとのづく

櫻井靖久

りせり

といへるなるべし。(この御殿は噂に聞いていたように、いかにも豊かに富んでいる。三枝のように三棟四棟に殿造りをしていゝ。)⁽³⁾ 枕詞「さきくさの」は「三つ」にかかるとも

また、この古今和歌集の歌は、引用変化して催馬楽の歌詞ともなっている。

この殿は宜も宜も富みけり三枝のあはれ三枝のはれ
三枝の三つば四つばの中に殿づくりせりや殿づくりせりや⁽⁴⁾

そして、この古今和歌集の序もしくは催馬楽の歌は、後の『宇津保物語』「蔵閣下」、『源氏物語』「初音」「竹河」、『太平記』中の「三枝」の祭として引用される。三枝（福草）部としては『顕宗紀』に見え、「齒」の比喩として『顕宗紀』に見える。そこでは、父の市辺王の遺体を掘り出す時に、その「三枝の齒が証拠になる」とし、その「三枝のごとき押齒」の注に「齒がきれいに並ばないで、重なって生えていた意」と説明する。

それでは、万葉時代に春先の野に咲く「三枝」とは、現代の何にあたりどのようなものをさすか。現代の山野においても、春先

に普通に見られるはずのものである。しかし、この「三枝」の解
釈史としては、現在においても定説となっていない。以下、考察
を進める。

二 「ヤマユリ」は「ミツマタ」か

「さきくさ」の注として、代表的なものとして『日本古典文学大
系 萬葉集』¹⁰を引く。

サキクサ 諸説紛々として定まらない。(中略) 花期のほか、
和名抄・本草和名・姓氏録などの記述や万葉集の字面などに
より、ある部分(枝・茎・葉)が三つに分岐する植物という
説、サキを幸の意としてめでたい植物とする説、サキを割キ
と解し枝や幹の割け易い植物とする説、サキを咲キとしたり
諸草に先立ツ意とする説などがあり、ヒノキ・ミツマタ・ジ
ンチョウゲ・ヤマユリ・ササユリ・イカリソウ・ミツバゼリ・
ツリガネニンジン・オケラ・ヤマゴボウ・フクジュソウ・レ
イシなどに擬している。ヒノキ(檜)説は「この殿はむべも
富みけりさきくさの三つ葉四つ葉に殿づくりせり」の歌を誤
解し、サキクサを建築材と考えたもので、誤りであると思う。
その他のものも、長所がある一方、クサというに適當である
か否か、万葉時代までに日本に来て居たかどうか、サキと呼
ぶ理由があるかなどの疑問があったりして、未だ決定的なこ
とが言えない状態である。

この注によれば、「サキクサ」という言葉の注目度は高いもの
の、それぞれの説明があまりにも多方に広がりすぎて、まとめ

のつかないものとなっている。

そこで、これらの説を整理した松田修の解説¹¹を引用する。

このサキクサ、今はミツマタが定説となっているが、これに
は従来

- (1) ヤマユリ説 (『冠辞考』『古事記伝』)
 - (2) ジンチョウゲ説 (鹿持雅澄『万葉品物考』)
 - (3) ミツバ説 (井上通泰『万葉集新考』)
 - (4) ツリガネニンジン説 (福井春水の佐岐久佐之説)
 - (5) イカリソウ説 (『古名録』)
 - (6) ヒノキ説 (『河海抄』『奥義抄』)
 - (7) マツ説 (俊恵法師)
 - (8) 福草説 (『万葉代匠記』福草考)
 - (9) ミツマタ説 (『国史昆虫草木考』『万葉植物新考』)
- などの諸説がなされていた。しかし、これらの諸説の中で問
題にされているのはミツマタ説とヤマユリ説である。
- ヤマユリ説は、ヤマユリに古名、サキの名があり、奈良の
率川神社で行われる三枝祭^{さいごまつり}には、三輪山に生ずる山百合
(略)を用いているなどの理由によるものであるが、ヤマユ
リにサキの名はあってもサキクサとは関係がなく、またヤマ
ユリは夏の花で、万葉の「春さればまづ三枝の」というのに
は合致しない。

しかるに、ミツマタは、三又の意で、その枝が三本づつに
分かれているのでこの名があり、万葉の用字「三枝」も同じ
であるし、万葉の歌にもよく合致するからである。ただ、ミ
ツマタはもと中国産で、その渡来年代が明らかではなく、は

たして万葉時代に存在していたかどうかが問題になるが、この時代にはすでにコウゾやカジノキも輸入されているし、これと同類のミツマタも輸入されていたように考えられる。

佐々木信綱の『萬葉集事典』¹²は、「諸説がある」中で、春まづ花さくミツマタ（三極）がよいであろうか」とし、現代の『原色万葉植物図鑑』¹³の小村昭雲は、「ミツマタは中国原産の落葉低木で、わが国には古く渡来したものらしく、奈良朝のころすでに知られていたのである」とする。更に『萬葉植物事典』¹⁴の大貫茂も、「現代名はミツマタとする説が有力……ミツマタは、ベニバナ、アサ、アワ、イネなどの有用植物とともに古代に渡来したと考えられている」と書く。

しかしながら、「和紙の歴史」また「植物の渡来史」においてはこの見解を否定する。

寿岳文章は、和紙の歴史の中で次のように説明する。

この時代（奈良時代）¹⁵は麻紙を主とし、コウゾやガンピを材料とするものがこれにつき、そのほかいろいろの植物繊維を試用したことは（正倉院文書）によっても明らかである。（中略）ミツマタが製紙原料となったのは戦国時代の末からで、¹⁶甲斐・伊豆・駿河の方面にひろがっていたらしい。

牧野富太郎は、植物図鑑の「ミツマタ」の中で、「中国原産、慶長年間に渡来し」と説明する。

更に、木下武司は「ミツマタ説」の否定に追い討ちをかける。

もともと日本に原産せず、製紙原料として中国から渡来したもので、その時期も確かな記録では室町時代後期から江戸初期であり、万葉時代にあったという証拠はない。（中略）中

国でさえ、ミツマタを製紙原料として本格的に栽培するようになったのは近世になってからである。早春、葉に先立って三十〜五十個の花を密集してつけるのであるが、それほど目立つ特徴的な花をつける木が、『本草和名』や『和名抄』ほか古典の文献に載っていないのは不自然と考えるべきであり、サキクサをミツマタとするのは無理であろう。これで「ミツマタ説」の根拠は崩れる。その前段階で「ヤマユリ説」と「ヒノキ説」は否定されている。

三 「イカリソウ説」と「ジンチヨウゲ説」

木下武司は、「サキクサ」を「イカリソウ」と考える。¹⁸

これまでは三枝をサキクサと考え、正訓としての字義はまったく無視されてきた。三枝は「三つに分かれた枝」の意であるが、これに合致する植物はきわめて限られてくる。畔田萃山説によるメギ科の多年草イカリソウはその一つで、形態的特長が鮮明で、一名三枝九葉草（略）というように、枝葉ともに三つに割れているから、三枝の字義に完全に合致する。また「裂き草」すなわち「幸き草」という名で呼ばれても不自然ではないことはいうまでもない。（中略）イカリソウの花期は春であり、歌の内容とも矛盾はない。（中略）北海道西南部から本州の山野の落葉樹林に普通に生えるイカリソウこそ、三つの枝がはっきりしており、サキクサというにふさわしいと考える。

ここに説明されるように、「イカリソウ」が「三枝九葉草」と

も呼ばれ、三本の枝に分かれ、それぞれの枝ごとに三枚の葉を持つというのはいずれも正しい。しかし私が考えるには、この植物が葉草として著明であり、乾燥標本（商品あるいは薬種）として手に取り持つので、そう観察されるのではないかと考える。何故ならば、派手で目を引くイカリソウの花に比べて、それを支える三本の枝はあまりに細く、貧弱であり、図鑑の中で参照してもわかる通り、自然の中では他の植物と比較して目立つことはない。とても「三本の中の」真ん中の（枝）」とか、「春になると）まず咲く三本の枝」という印象は持つことは出来ない、と考える。いくら葉草とはいえ、自然界においてイカリソウは花が目される程には、その三本の枝（葉）に注目されるとは、私には考えられない。

同じように、三つの枝に分かれているのに「三枝」に見えないものに「ジンチョウゲ」がある。鹿持雅澄は『萬葉集品物図絵』の中で、わかりやすいように三つの枝に書き分けてはいるが、我々が実際に接するジンチョウゲは、葉の繁りに惑わされて三枝であることに気付かない。しかも、牧野富太郎によれば中国原産で室町時代に渡来したとあるので、万葉時代の「サキクサ」とするには不適となる。

四 『倭名類聚抄』から読みとる「サキクサ」

万葉集に歌われる「サキクサ」は、「三枝の中にを寝む（九〇四）」とあるように、まず「草」であり、「三本の枝の真ん中に」と読みとれる。また、「春になるとまず咲く三枝（二八九五）」の草であるという。

この名前を『和名類聚抄』の草の部類で求めると、「文字集略云易（音娘和名佐木久佐日本私記云福草）草枝枝相植葉葉相當也」とある。それでは「易」とは何か。『広漢和辞典』には「易」²⁰とある。それでは「易」とは何か。『説文』易草也。チヨウ・ヨウ・トウ 野菜の名。やまごぼう。（説文）易草也。枝枝相植葉葉相當。」と説明する。つまり、「易」は「サキクサ」であり「易はヤマゴボウ」であることがわかる。そして、ヤマゴボウの葉を野菜として摘んで食べた、ことになる。言い換えれば、万葉人は「ヤマゴボウ」の葉を野菜として食べるために採取した、ことがわかる。植物図鑑の説明によれば、「ヤマゴボウ属は、丈の高い草本で太い根があり、葉は大きく」とあり、「ヤマゴボウは高さ1m前後になり、葉は楕円形、深緑色、長さ十〜十五cm」と説明する。図鑑の写真で想像すると、まだ緑が少ない早春の野山にすくと立ち、ツヤツヤした若葉、しかも大型の葉を持つヤマゴボウの姿はかなり目立つ存在であり、柔らかな味が良いならば、大いに好まれ期待する野菜となつたはずである。

ただし、「和名抄」の「サキクサ」である「ヤマゴボウ」の葉は、実際には三枝でも三枚でもない。成長すれば、いくつかに枝に分かれし、葉も互生で次々につけてくる。しかし、他の野草よりも時期が早く先に芽を出して、葉を広げる時には、その頭頂の葉と、右の葉、左の葉というように三叉状になる。イメージとしての「三枝」として目につくことは考えられる。同時にその頃の時期が、野菜（山菜）としての食べ頃であり、好まれたならば関心も高くなる。更にこのことは、古今和歌集の「さきくさの三つば四つば」という言葉にもつながってゆく、とも考えられる。

一方で、『大和本草』に「商陸一名易根」とあるように、『和名

抄』においては、「やまごぼうの根を「商陸」という薬草名」として載せている。『広辞苑』には「商陸根 ヤマゴボウの根茎を乾燥した生薬。硝酸カリを含み利尿作用がある」とする。具体的に『和名抄』の中には、「商陸本草云商陸（和名伊乎須木）」あるいは「散薬の部」に「商陸散（治白疾）」とある。

また、『倭名抄』は「さきくさな」も説明する。「薺尼本草云薺尼（臍襴二音和名佐木久佐奈一云美乃波）」この語を『広漢和辞典』で引く。「萐デイ・ナイ①薺尼・薺尼は、つりがねそう。また、さきさよう。」と説明する。

「さきくさ」が早春の若い「やまごぼう」の葉を野菜（山菜）として食用するならば、「さきくさな」が「つりがねそう」の葉を食するものであつておかしくない。現在、山草を食する言葉に「山で旨いはおけらにととき（つりがねにんじん）」と言われる。「つりがねそう（つりがねにんじん）」は広く食べられる山菜で、美味なものとして名高い。近似種のきさきさようも山草として食べられている。きさきさようは方言名では「ぬのば」とも呼ばれ、「一云美乃波」と関係を持つかとも考えられる。

松田修は解説する。

ツリガネソウとはツリガネニンジン的一名で、花の形を釣り鐘に、人参は朝鮮人参にたとえた名で、この漢名は「沙参」を慣用している。「薺尼」はこれと似たツバナの漢名で、軟らかい葉に基づき、古くからこの葉は山菜として食用に供している。

「やまごぼう」の薬草名である「商陸」の典故としては、『出雲国風土記』の「意宇郡」「出雲郡」「神門郡」がある。いずれも

山野の産物を列記した部分であり、「凡て諸の山野に在るところの草木」として挙げられている部分である。

その頭注は説明する。

以下の草木の内、草類は薬草として用いられたものを挙げてゐる。延喜（典薬寮）式に諸国から貢進させた薬品の品目とほぼ同じ。

「やまごぼう」については、その根を薬とするものであるので、よく知られた植物であり、更にその大型の葉を早春の山菜として食用したというのは、「さきくさ」の正体として無理のない結論であると考ええる。

戦争中に、ヤマゴボウの葉を食した経験を持つ、土屋文明の説（『万葉集私注』）を引用する。

サキクサについては従来種々の説が行はれて居るが、和名抄に（略）とある筈以てサキクサとすべきである。文字集略に云ふ所は説文解字を其の儘取つて居るので、此の筈は蕩であり、蕩蕩であり本草経、爾雅の注、義疏等により商陸即ちヤマゴボウとすべきである。ヤマゴボウは早春芽立つもの故（略）サキクサの名は諸草に先立つ意と見える。薺尼（ツリガネニンジン及びソバナを併せたものであろう）をサキクサと呼ぶのも、同じ命名法と思はれる。「春さればまづさき草の」（卷十、一八九五）にもよく合ふ。又「三枝」の字を当てるのも其の形態をあらはして居る。尤も現在東京で多く見られるもの、戦争末期に野菜欠乏の吾々の咽喉を刺激した所のもは所謂洋種山ゴボウで、花がたれて居るために、三枝が著しく目につくとは言へないかも知れないが、本当の商陸

即ち日本在来種ならば、容易に其の三枝状を認めることが出来る。説文解字の記載からは対生の如くも見えるが、ヤマゴボウは対生ではないものの、頂の花穂に近い側枝と其の次の側枝がひどく接近して出て、主茎と同大以上になり三又三枝状を呈することが多いのである。(中略)和名抄には、別に商陸を上げ和名イラスギを付して居るのは、大体厳密な科学的記載の書ではないから、ヤマゴボウにサキクサ、イラスギの二名が行はれたのを、一つを葛に、他を商陸に当て、葛即ち商陸なることまでは、思ひ及ばなかつたものと見れば解決される。或は又、サキクサは野菜として用いる莖葉の称呼であり、イラスギは薬用とする根の称呼であり、各別に記載されたのかも知れぬ。(中略)序ながら古今集の「この殿はうべも富みたりサキクサの三つば四つばに殿づくりせり」のサキクサは商陸でも通ずるが、和名抄のサキクサナ即ち齊尼の輪生葉なるものツリガネニンジンをもとも知れぬ。此の吾妻郡ではソバナもツリガネニンジンもともにワカナと呼び、ヒカゲ、ヒナタを冠して両者を分つて居る。齊尼に両者を含むのと一致して注意される。

土屋文明の説は、戦争中の東京での実体験及び群馬県吾妻郡での見聞と方言から考察したものであるから、その結果に無理がなく納得できるものである。しかもその内容が、『和名抄』に説明される「サキクサ」「サキクサナ」という根拠から出発しているので、その説明の筋と論拠には説得力がある。

これに比すると、「ヤマユリ」「ジンチョウゲ」「イカリソウ」「ミツマタ」等の説は底が浅く、いずれもその根拠を失っている。

五 むすびとして

以上の考察により、万葉時代の枕詞「三枝さんしきの」という言葉が様々に解釈されて、混沌としており、全てを並べると八百屋の店先のような陳列場になることがわかる。それでも、時代による経過を経て、「春という季節に先がけて咲く植物(先草せんそう)」という意味と、「三つに分かれる枝(三枝)」の意味を重ね持つ植物として考えられた。そしてそれを持つ実態じつたいのものは「三榎さんえん」の「花(花期は三々四月)」と「三又の枝」が、それを指すものに違いないと思われた。確かに「三榎」の花は、他の花が咲かない三月に葉よりも早く黄色の筒状の花を咲かせて、その枝が三又状という特徴を持つている。製紙原料でもある。

しかし、寿岳文章はミツマタが和紙の原料となるのは戦国時代からと明言し、牧野富太郎はミツマタは慶長年間に渡来と述べる。木下武司は、中国でさえ製紙材料のミツマタを本格栽培したのは近世になってから、と言う。さらに、万葉以来あるなら『本草和名』や『和名抄』にないのが不自然という。どれもがもつともな理由であり、「ミツマタ説」は不成立となる。

原点として『和名抄』にもどれば、「さきくさ」は「葛ちまゆ(和名さきくさ)」として書かれ、辞典の意味は「やまごぼう」と説明する。同様に「葛」は葉草名として「商陸(和名いすぎ)」となり、「商陸散」ともなる。

これを採り上げて説とするのは『万葉集私注』の土屋文明である。しかも、氏は戦争中にその類を野菜として、食した経験を持

つ。関連の用語の「サキクサナ」をも、氏の日常に使用する方言として解明する。その「サキクサ」の説明と解釈及び植物の同定については、無理がなく、最少の知識で、最大の妥当性を持つものと考ええる。万葉の「サキクサ」は、土屋文明の説く「やまごぼう」を採るべきものとは私は考える。

それでは最後に、野菜としての「やまごぼうの葉」のイメージはどんなものか。「深緑色で楕円、大きさは10～15cm」の柔らかな大型の葉は、「(キダチ) チョウセンアサガオ」の葉か、もっと身近には「アジサイ」の葉を思い出せば近いだろうか。但しこの二種は有毒であるので、食することはできない。

注

- (1) 高木市之助・五味智英・大野晋校注『日本古典文学大系 萬葉集二』一九七九年、岩波書店、一一九頁
- (2) 注1『萬葉集三』六九頁
- (3) 窪田章一郎校注『古今和歌集』一九七四年、角川文庫、一一頁、二七一頁
- (4) 小西甚一校注『日本古典文学大系 古代歌謡集』一九七九年、岩波書店、四〇二頁
- (5) 河野多麻校注『日本古典文学大系 宇津保物語二』一九六一年、岩波書店、四四五頁
- (6) 山岸徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語二』一九五九年、岩波書店、三八四頁、『日本古典文学大系 源氏物語四』一九六二年、岩波書店、二六一頁
- (7) 後藤丹治・釜田喜三郎『日本古典文学大系 太平記二』一九六一年、岩波書店、四一一頁

- (8) 坂本太郎他校注『日本古典文学大系 日本書紀上』一九七九年、岩波書店、五二五頁、六三九頁
- (9) 注4土橋寛校注『古事記歌謡』一〇七頁
- (10) 注2四六一頁
- (11) 松田修『古典植物辞典』一九八〇年、講談社、一二八～一三〇頁
- (12) 佐々木信綱『萬葉集事典』一九八〇年、平凡社、五七九頁
- (13) 小村昭雲『原色万葉植物図鑑』一九六八年、桜楓社、二七九～二八〇頁
- (14) 大貫茂『萬葉植物事典普及版』二〇〇五年、クレオ、四九頁
- (15) 寿岳文章『世界大百科事典』「和紙」の項
- (16) 牧野富太郎『原色牧野植物大図鑑 離弁花・单子葉植物編』二〇〇一年、北隆館、三五七頁
- (17) 木下武司『万葉植物文化誌』二〇一〇年、八坂書房、二四四頁
- (18) 注17二四三～二四四頁
- (19) 鹿持雅澄『萬葉集品物図絵』『覆刻日本古典全集 萬葉集品物図絵』一九八二年、現代思潮社、「ささくさ」の項
- (20) 中田祝夫編『倭名類聚抄』一九八一年、勉誠社文庫、二二八頁
- (21) 佐竹義輔他編『日本の野生植物 草本 II 離弁花類』一九九〇年、平凡社、二七頁
- (22) 与謝野寛他編『日本古典全集 本草和名下巻』一九二六年、日本古典全集刊行会、四十九(頁づけなし)
- (23) 注20二二三頁
- (24) 注20一三六頁
- (25) 注20二二二頁
- (26) 山口昭彦『山菜・木の実・草の実ガイドブック』二〇〇一年、

永岡書店、三六頁

(27) 注⑪一三〇頁

(28) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』一九七八年、岩波書店、一一七頁

(29) 土屋文明『萬葉集私注三』一九六九年、筑摩書房、二四三―二四六頁

(さくらいやすひさ 元神奈川県立高等学校長)